

*P. ultimum* が関与していることが明らかとなった。

(岐阜大流域研セ・\*INTA-IMYZA, Argentina)

(85) 川口 章・井上幸次・久保田真弓\*・百町満朗\*・那須英夫 ***Rhizoctonia solani*** によるトウガン実褐斑病 (仮称) Kawaguchi, A., Inoue, K., Kubota, M., Hyakumachi, M. and Nasu, H.: Fruit Scab of Wax Gourd Caused by *Rhizoctonia solani*. 岡山県南部で栽培されているトウガンの地面に接した果実表面に淡褐色のかさぶたが形成される症状が数年前から発生している。初め、茶色でややへこんだ病斑を生じた後、次第に盛り上がり、数 mm から大きいもので 3~5 cm 程度で不定形の淡褐色斑を生じる。激しいものでは果実に数十個のかさぶたが形成されるが、褐変はごく表層部に限られ、果実の腐敗には至らない。これらの病斑部から常法により菌を分離したところ、*Rhizoctonia* 属菌が高率に分離された。菌糸生育は 10~35°C で認められ、最適生育温度は 25~30°C であった。PDA 上に形成された菌糸の 1 細胞当りの核数は多核であったことから、本菌は *R. solani* であると考えられた。分離菌を穀粒培地で培養し、圃場でトウガン果実の下に敷きつめて接種したところ、約 7 日後には有傷、無傷接種ともに原病徴が再現され、病斑部から接種菌が再分離された。本菌によるトウガンの病害は本邦未記載であるので、病名として実褐斑病 (Fruit scab) を提唱する。現在、菌糸融合群および培養型を調整中である。(岡山農試・\*岐阜大応生)

(86) 石井聡志・荒川征夫・稲垣公治 菌体構成脂肪酸組成によるイネ赤色菌核病菌の菌種内変異 Ishii, S., Arakawa, M. and Inagaki, K.: Intraspecific Variation of *Rhizoctonia oryzae* Causing Bordered Sheath Spot of Rice, Based on Fatty Acid Composition. 赤色菌核病菌菌種内での多様性を知るため、水田内および周辺の各種雑草とイネから分離した 34 菌株 (雑草: 14 菌株, イネ: 20 菌株) の菌体構成脂肪酸組成を調べた。供試菌をジャガイモ煎汁液体培地で 28°C, 14 日間培養し、抽出した脂肪酸を塩酸-メタノール法によりメチルエステル化し、GC (Yanaco G2800 FP) を用いて分析した。主要構成脂肪酸はパルミチン酸 (組成比: 8~18%), ステアリン酸 (2~7%), オレイン酸 (5~15%), リノール酸 (61~79%) の 4 種類、他にミリスチン酸、リノレイン酸等が低率 (1.5%未満) で確認された。脂肪酸組成比を変数として主成分分析クラスター分析を行なった結果、4 クラスター (C1~4) が得られた。C1 にはリノール酸組成比が比較的低い 12 菌株 (平均: 65%), C2 にはリノール酸が高い 2 菌株 (79%), C3 には C4 と比べパルミチン酸が高い 14 菌株 (14%), C4 には C3 に比べてオレイン酸、ステアリン酸が高い 6 菌株

(各 12, 4%) が所属し、これらの結果は菌叢形態等の培養の性質を反映している可能性が示唆され、さらに検討する予定である。(名城大・農)

(87) 向嶋博行・百町満朗\*・梅沢順子 ***Rhizoctonia solani* AG2-2IIIB** によるダイズリゾクトニア根腐病の発生 Mukobata, H., Hyakumachi, M. and Umezawa, J.: Occurrence of *Rhizoctonia* Root Rot of Soybean Caused by *Rhizoctonia solani* AG2-2IIIB. 2003 年と 2004 年に富山県の下村や富山市等のダイズ (品種: エンレイ) で根腐病の発生が認められた。播種後における発芽・苗立ちは良好であったが、播種 3~4 週目頃から下葉の黄化や胚軸部の褐変とともに著しい根腐れを呈するものが目立ち始めた。その後、病勢は徐々に進行し、細根が脱落して主根上部に気根を認める株もあった。発生様相は坪状または散発的で、全体の 3 割程度が枯死して欠株となる圃場も見られた。罹病部から常法により菌を分離すると単一の *Rhizoctonia* 属菌が高率に分離された。分離菌を宿主に接種すると原病徴が再現され、接種菌が再分離された。PDA 培地上での本病菌の生育適温は 28°C 付近で、35°C においても生育した。菌そうは茶褐色を呈し輪帯を生じた。これらの性状及び菌糸融合結果から、本菌は菌糸融合群第 2 群 2 型 (AG2-2), 培養型 IIIB に属することが明らかとなった。これまで AG2-2 によるダイズ根腐病の報告は海外ではあるものの、わが国では見当たらない。なお、本病に対し、フルトラニル等の薬剤種子粉衣で防除効果が認められた。

(富山農技セ農試・\*岐阜大応生)

(88) 安田文俊・山岸大輔\*・赤松 創\*\*・伊澤宏毅・児玉基一朗\*・尾谷 浩\* 担子菌酵母様菌 *Acaromyces ingoldii* および *Meira* sp. によるナシ汚果病 (病原追加) Yasuda, F., Yamagishi, D., Akamatsu, H., Izawa, H., Kodama, M. and Otani, H.: Fruit Stain of Japanese Pear Caused by Basidiomycetous Yeast-Like Fungi, *Acaromyces ingoldii* and *Meira* sp.. 2001 年 9 月、鳥取県内においてニホンナシ 'ゴールド二十世紀' などにカビ臭を伴う赤アザ症状の果面障害が多発した。罹病果実から高率に分離された酵母様菌の形態学的観察、生化学的性状試験、26S rRNA 遺伝子の D1/D2 領域および 5.8S rDNA を含む ITS 領域の塩基配列解析などの結果から、分離菌は *Acaromyces ingoldii* および *Meira* sp. であると同定した。*Meira* sp. と同定された菌株は、系統解析の結果から、*M. geulakoniidii* および *M. argovae* に近縁であると考えられたが、5.8S rDNA を含む ITS 領域の塩基配列解析により複数の塩基置換およびギャップが認められたため、*Meira* 属の新種である可能性が示唆された。これらの担子菌酵母様